



田中訥言「日月図屏風」  
名古屋博物館

# 失明予感 到達点の大作

横幅7尺を超える六曲二双の金びようぶ。全面に金箔を貼ったその上に、右隻には夏の荒海に昇る金の日輪、左隻には雪が積もった川の上空に輝く銀の残月。ほかには何も描かれていない。

今の愛知県清須市に生まれ、京都で名をあげた江戸後期の絵師、田中訥言の「日月図屏風」だ。「金銀を使う装飾的技法を研究していた訥言の最終的な到達点」とされる。かつては三重県桑名市の素封家が所有し、1880年に明治

## 田中訥言の「日月図屏風」

天皇が三重に行幸した際、休憩所を飾った。

訥言は命がけで絵を描いた頑固な人だった。失明した門人を絵筆が持てなくなったら生きる価値なしとなじった。訥言にも眼病があった。失明を予感しつつ「日月図屏風」や「百花百草図屏風」（重要文化財・徳川美術館蔵）を描いたのは50歳前後。やがて失明した訥言をくだんの弟子が訪れ、さあ先生どうすると迫ると、訥言はすでに死ぬ決意を固め断食していたという。

訥言と同時期の人に本居春庭がいる。父の宣長を継いで日本語を研究した春庭は、失明後、国語研究史に残る文法書を完成させた。一方の訥言は古来の日本画を復活させて名前を残したが、絵が描けなくなったために自殺した。

当時有数の眼科病院だった尾張の馬島明眼院で何度か治療を受けた春庭と、しばしば里帰りしていた訥言に接点はなかったのか。研究者が調べたが、訥言の治療は確認できなかったという。

「日月図屏風」の公開は名古屋博物館の常設展「尾張の歴史」で20日まで。